

というか、彼女の場合、きつと静雄から話を聞くなり自分を捜しにマンションを飛び出し、そしてすぐに見つけて説得のためにつれてきたのだろう、と容易に想像がついてしまう。

それほど、切羽詰まってしまうほどに臨也の本性がまずい、ということなんだろう。そして友人たる帝人を心底心配してくれている。気持ちはありがたい。

「確かに臨也は眉目秀麗だけど性格最悪だし、根性極悪だし、性根腐敗してるしさ」

「……新羅さん、臨也さんの友達ですよね？」

「うん、そうだよ。だから臨也のことはそれなりに知ってる。だからこうやって親切丁寧に誠心誠意込めて君を説得してるわけだけど」

唯一、と言っているだろうか友人にここまで言われるあたり、臨也は本当にロクデナシらしい。

「あいつの恋人は何人か見てきたが、ろくなことにならねえんだ。悪いことは言わねえ、早く別れるすぐに別れるとつと別れとけ」

真剣な眼差しで告げる静雄に、嘘は見えない。というか、間違いない真実なんだろうな、と思える。臨也は今までの恋人をよほど酷い捨て方をしていたのかもしれない。

(ありえるなあ。臨也さんだし)

『まだ帝人は若いんだ。人生を捨てるには早すぎると私は思う。捨てるにしても臨也はない。絶対ない。あんまりすぎる』

性格がものすごく良い妖精にすらこう評される男、折原臨也。よっぽどなんだろう。それが納得できてしまうのは幸か不幸かどちらなのだろうか。

「あの、みなさんの気持ちは分かりました。ご心配くださり、本当にありがとうございます」

ぺこり、と深々と頭を下げる。

「でも大丈夫なんです。昨日は時間がなくて詳細は説明しなかったんですけど、臨也さんと恋人になったのはバイトなんです。あ、援助交際とかじゃなくて」

そうして、臨也から恋人ごっこのバイトを持ちかけられた経緯と、それを了解した理由を説明する。

素っ頓狂な申し出だが、何しろ折原臨也の発言だ、という前提があるのでそこは皆、あまり不可思議には思わなかった。

あいつは全てがおかしいから何を言っても逆におかしくない、という話になる。

「恋人ごっこかあ。相変わらず理解不能な思考回路で臨也らしいけど」

「けどよ、本気じゃねえから大丈夫って問題でもねえだろ」『ごっこなんて良くない。あいつが恋人なんてもっと良くないが、そういうことは真剣に向き合うべきことだ』

納得する新羅、生真面目に反論する静雄、恋愛観を述べるセルティ。三者三様の反応だが、その根底は変わらない。つまり、たとえ『恋人ごっこ』だとしても折原臨也はやめておけ、という話に戻る。